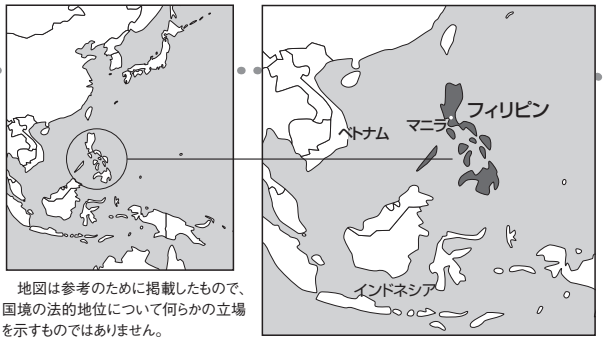
ユニセフ子ども物語
地球に生きる子どものくらし

Republic of the Philippines

フィリピン共和国



地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。

虐待の悪夢からぬけ出せた朝

ミミはフィリピンの首都マニラ郊外に住む12歳の女の子。妹と3人の弟、お母さん、そして、お母さんが2年前に再婚したお父さんの7人家族です。お父さんは3カ月前に失業してから仕事をしていません。ミミはいつもいばっているお父さんが好きではありません。収入がなくなってしまった家族の生活を支えるために、お母さんはとうとう家政婦として外国に出稼ぎに行くことになりました。今度帰ってこられるのは何カ月も先のクリスマスの時です。

お母さんがいない間、ミミは家事や、妹と弟たちの世話をしなければならなくなりました。ミミは一番上の娘として、お母さんに言われた通り料理や洗濯、掃除などを一生懸命にやりました。眠いのをがまんして夜に勉強をするので、寝るのはいつも夜中です。

ある晩、お父さんがミミを呼びました。「家事は終わったか? 話したいことがあるからこっちへ来なさい。ドアを閉めなさい」と強く命令する言い方でした。言われた通りドアを閉めると、お父さんはミミに近づいてきたのです。ミミは声も出ないほど驚き、身動きできませんでした。ミミは大きなショックを受け、その後、お父さんをさけるようにすると、今度は暴力をふるわれるようになりました。悪い夢を見ているようでした。

数カ月がたち、やっとお母さんが家に帰ってきた時、ミミは泣きながら、お父さんがしたことをお母さんに話しました。お母さんは、「ひどいウソをつく子どもになったのね。そんな話、聞きたくないわ」とおこってミミの話を信じてくれません。そしてまた、外国へ出稼ぎに行ってしまいました。

暗くしずんだミミの様子を心配した学校の女の先生がやさしく声をかけてくれました。ミミは勇気をふりしぼって悩みを打ち明けました。先生はだまって話を聞いてくれた後で、「ここに相談をしてみなさい」と子どもを保護する団体の電話番号を教えてくれました。でもミミはお父さんがこわくて電話をすることができませんでした。

しばらくして、朝、妹を起こしに行くと「起きたくない」と泣きじゃくります。ミミはお父さんが妹にも自分にしたひどいことをしたとわかったのです。

ミミは決心して先生からもらった番号に電話をして助けを求めました。翌朝、ミミたちは子どもの保護センターに引き取られ、やっと悪夢からぬけ出すことができました。

「もう大丈夫よ」というセンターの人のやさしい声がミミには朝の明るい光のように感じました。

<文・構成：(財)日本ユニセフ協会>

物語の国
フィリピン

7,109もの島からなる国で、面積は日本の約80%。人口は約8,300万人です。植民地時代の大地主と小作人の関係が現在も続いており、貧富の格差が非常に激しく、海外で働く多くの人びとの多額の送金がフィリピン経済を支えているといわれています。

沈黙を破り、理解を広げることで、子どもを守る

フィリピンの子どもの現状

フィリピンは近年のめざましい経済発展にもかかわらず、人口のおよそ37%が貧困ライン以下の生活をしています。6～10万人の子どもが人身売買や性的搾取、虐待などの被害にあっていると推定されていますが、実際に報告されている件数はずっと少なく、多くの被害がまだ隠れているとみられています。さらに、約25万人いると推定されているストリートチルドレンも、そうした危険におびやかされています。

フィリピンの状況
（よりくわしい統計は『世界子供白書2007』をご覧ください）

項目	フィリピン	日本
5歳未満児死亡率（1000人あたり、2005年）〔人〕	33	4
1人あたりの国民総所得（2005年）〔米ドル〕	1,300	38,980
1日1米ドル未満で暮らす人の割合（最新のデータ）〔%〕	16	統計なし
失業率（日本は総務省データ　2007年最新）〔%〕	11.0	3.7
初等教育純就学率（最新のデータ）〔%〕	男93　女95	男100　女100

出典：世界子供白書2007

「沈黙を破る」—改善策のむずかしさ

子どもの性的搾取や虐待は子どもを欺く許されない犯罪です。それは知り合いや近親者によることが多く、犯罪の摘発、または被害者の保護がむずかしいという現実があります。

子どもを保護するNGOとの協力

ユニセフは、ミミのような子どもを題材にしたアニメーションや漫画、演劇などを通じて、子どもの性的搾取や虐待などの問題を社会に伝え、理解を深める取り組みをしている地元のNGO“Stairway Foundation”を支援しています。

この問題は、語ることがタブー視されかねないむずかしい問題です。しかし、語らなければ事実は隠され、加害者は何の処分も受けることがありません。だからこそ、「沈黙を破る」ことが必要なのです。子どもたちは性的搾取や虐待という危険について知識がないため被害にあいやすく、被害を受けたあとに口を閉ざしてしまいがちです。たとえ相談できたとしても、まわりの人たちから信じてもらえず、心に二重の傷を負ってしまうことがあります。

ユニセフは問題に対する啓発活動を通じて、被害を受けた子どもが信頼できる人に相談できるようにしたり、子どもの言葉を信じて親身になって話しを聞いたり、子どもが心と体の傷をいやせる適切なケアを受けられるようにすることを目的に、活動しています。「子どもを傷つけてはならない」ということを多くの人が認識し、理解し、発信することによって問題の発生を抑制することにもつながっていきます。

©日本ユニセフ協会/ozu
子どもの性的搾取を扱った漫画

演劇の活用やさまざまな機関との連携

ユニセフは、子どもの性的搾取や虐待、児童労働などの問題を扱った演劇『割れた鏡*』をマニラのいくつかの大学で上演する支援を行っています。これまでに3,000人近くの教員や学生がこの劇を鑑賞しました。さらに、さまざまな機関と連携して子どもの性的虐待の予防・対応に関わる支援も行っています。

＊テンポのよいラップ（歌）から始まり、人身売買、性的搾取などの被害にあった3人の子どもが告白するという内容です。

©日本ユニセフ協会
子どもの性的搾取をテーマにした演劇「割れた鏡」の一場面

ゴミの山で働く子どもたちへの支援

マニラ郊外ケソン市にあるパヤタスは、ゴミの山に囲まれている地域です。毎日何百台ものごみ収集車がごみを運びこんできます。子どもたちはゴミの中からリサイクルできる物を見つけて売り、家族の生活を支えています。ゴミの山で働く子どもは約3,000人。1日働いておよそ100ペソ（約300円）の収入です。不衛生で危険な物が多いゴミの山で長い時間働くことは、けがをしたり、呼吸器の病気になったりするなど、子どもの健康と安全にとって深刻な問題です。 働かなければならないために学校に通う時間がなくなったり、学用品や制服が買えないなどの理由で学校をやめてしまう子どももいます。

ユニセフは、パヤタスでストリードチルドレンの教育活動を行うNGOを支援しています。約250人の子どもたちが、学校に通えるように奨学金や制服、くつ、かばん、ワークブックなどの支援を受けています。また正規の学校に通えない子どもには、非正規の学校で教育を受け、大学入学に必要な高校卒業資格を得られるように支援をしています。

©日本ユニセフ協会
パヤタスを取り囲むゴミの山

©日本ユニセフ協会
非正規の学校で英語を学ぶ子どもたち